

札幌 発・紙リサイクル共創モデル実験

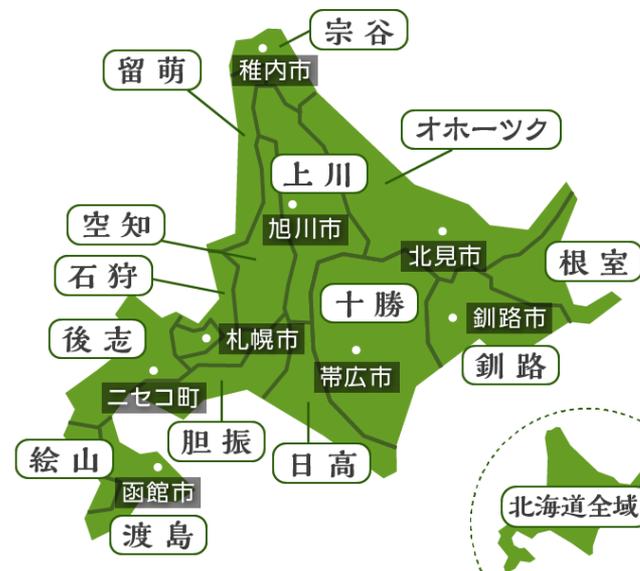
北海道 広域連携を目指して

～地域循環共生社会づくり～



2025年 月 日

要・札幌市使用許可申請



目次

- ① 啓発活動のストーリーイメージ
- ② 啓発活動の多様な協働体制イメージ
- ③ 札幌市の強みを生かした循環モデル
- ④ 当面の啓発活動イメージ「雑がみさまを探せ！」を軸に
- ⑤ 札幌市 第2次 環境基本計画との親和性
- ⑥ 北海道 第3次 環境基本計画との親和性
- ⑦ 期待される成果イメージ
- ⑧ 本提案への思い
- ⑨ 将来的な啓発活動の広域展開への期待

(参考)

- ・ 雑がみさまを探せ！（雑がみ回収促進社会実験）
- ・ 紙リサイクルの重要性
- ・ 紙リサイクルとSDGs
- ・ Towards 2030 & Beyond ・ 古紙センターPDCA

1. 啓発活動のストーリーイメージ

全国各自治体では、ゴミ焼却施設の更新・統合や最終処分場キャパの課題が顕在化しつつあり、**資源循環型モデルの更なる推進**が急務。

本提案は、札幌市を始め、**各自治体が有するポテンシャルを最大限**に活かし、**「人・資源・地域経済」が循環**するローカル・エコシステムの推進を目指すもの。

紙リサイクル（特に雑がみ）を中核とした地域共創モデルを推進し、**「環境」「教育」「地域経済」**の3分野を横断的に結び付けることで**「見えるリサイクルの輪」**を目指す。

導入に際しては、**既に札幌市が有する**地域資源、制度、ネットワークを**最大限活用**しながら持続可能な紙リサイクルモデルを**「啓発活動」を通じて「可視化」**する。

- (起) 紙ごみや雑がみをめぐる課題の再認識
- (承) 北海道の各自治体がこれまで積み上げてきた積極的施策と地域資源の可視化
- (転) それらを有機的に統合し、**地域全体の参加型**で展開する循環モデルづくり
- (結) その成果が県民生活の質を高め、**北海道ブランドと環境施策の発信力**を高める

1. 啓発活動のストーリーイメージ

資源循環を共創の中核主体として、雑がみ回収・利用を地域コミュニティに根付かせる。

多様な生活者・事業者・行政を結び、その成果と意義を可視化・共有することで、持続可能な地域共生圏の形成を目指す。

3つの軸を有機的に構造化する。

(1) 「見える化」×「つながる化」

自治体や企業、団体との共創事例を公開し、「つながり」の存在を社会に共有。

(2) 参加共感型コミュニケーション

情報の一方通行脱却「わかる・できる・続ける」体験を設計。

(3) 地域コミュニティ内経済・価値の共創

地域の循環共生圏、地域経済や自治体の課題解決と一体化するメッセージを意識。



2. 啓発活動の多様な協働体制イメージ

行政

各市町村（資源リサイクル関連、福祉、教育委員会等）：施策調整、拠点整備、学校授業導入、公益施設運営

教育機関

小中学高、大学（北大、札大、学園大、科学大など）EMS活動、新入生環境授業、ボランティア活動、PBL型地域参加

福祉・高齢者団体

就労支援B型事業所、社会福祉協議会、老人クラブ等：拠点運営補助、見守り交流

企業・商工会

スーパー、包装印刷、食品、信金、運輸等：店頭広報、ポイント制度連携、雑がみ袋広告、事業系雑がみ回収、SCCI連携

市民団体

PTA、NPO、環境ボランティア：地域拠点協力、イベント運営、住民啓発

メディア・研究機関

地元新聞社、TV、SNS、大学研究室等：広報支援、効果測定、全国展開モデル評価

静脈・製紙産業

周辺エリア内の製紙工場、古紙問屋、回収収集業者：雑がみ受入、回収・品質管理、搬送

スポーツ団体（少年・プロ）

少年野球・サッカー・ホッケー団等：集団回収、資源回収協力、啓発活動、保護者との家庭連携、エリア内のプロ球技チーム連携

需給両業界団体

古紙再生促進センター北海道地区委員会、北海道製紙原料直納商業組合：活動全般支援

3. 札幌市の強みを生かした循環モデル

大都市の規模と発信力

人口190万人を擁する大都市での実践は、市民・企業・大学を巻き込む広がりを持ち、全国・全道への発信力を備える。

資源循環と低炭素政策の整合

第2次環境基本計画の廃棄物削減や脱炭素施策と完全に整合し、雑がみや食品ロス削減を中心とした展開が可能。

教育機関との連動性

大学、高校、小中学校が市内に集積し、授業や課外活動を通じた分別啓発や回収実験など、若年層からの行動変容促進に有効な連携基盤を備える。

多様な市民活動の蓄積

環境保全・清掃・地域イベントなど多彩な市民活動が根づいており、分別行動や地域参加型の仕組みづくりに対する受容性が高い。共生社会の担い手づくりに活かせる。



道都としての発信力と広域的なネットワークを有する札幌市

札幌市は北海道最大の中核都市として人口約190万人を擁し、道内の政治・経済・文化・観光の中心。そのため地域循環共生社会づくりモデルを実践することで、市民・企業・大学・行政を巻き込んだ広範な協働が可能となり、成果は北海道全域へ波及する。

SDGs未来都市、ゼロカーボンシティ宣言都市である札幌市の第2次環境基本計画（2018～2030年度）で示された廃棄物削減、低炭素社会、市民参加型ガバナンスは本モデルの方向性と重なり、雑がみや食品ロス削減などの施策に直結する。また北海道大学をはじめとする研究機関や学生ボランティア活動は、世代横断型の循環共生を支える基盤となる。さらに雪まつりや観光資源を活かし、環境行動を都市ブランドと結び付けることで、市民啓発と来訪者への発信が同時に実現できる。都市規模、研究資源、観光力を兼ね備えた札幌市は、本モデルの先導役として親和性と強みを有する。

本モデルでは、回収された雑がみを地域内で選別・加工し、連携可能な製紙工場にて再資源化する“紙資源の地産地消”を再確認することで、輸送コストや環境負荷の軽減を図ると同時に地域内経済の循環性を高める仕組みを充実化し、地方都市に於ける全国のベンチマーク化を志す。

新規設備や格段の追加投資を前提とするのではなく、すでに地元地域が有する地域資源、制度、ネットワークを最大限活用しながら、段階的かつ持続可能に展開する「啓発モデル」を可視化。

4. 当面の啓発活動イメージ「雑がみ様を探せ！」を軸に（2025～26年度）

雑がみ啓発と学校教育との接続

市内小中学校において紙リサイクルに関する啓発活動「雑がみさまを探せ！」を通じた出前授業やワークショップを実施。
「子供から家庭を変える、社会を変える」児童生徒や保護者の家庭内分別を促進。

広域エリア内の製紙工場群との連携

札幌市を核とする道内域内には紙リサイクルの地域内処理・利用が可能な製紙工場の存在があり、それらとの連携を通じた、紙資源リサイクルの地産地消を更に推進。

スポーツ団体との連携

スポーツ少年団の資源回収活動協力、運動と公共活動の融合を図る。集団回収活動の活性化、世代間交流の機会にも繋げる。また道内のJ、各プロ球技チームとの連携を通じ、試合時の「雑がみさまを探せ！」啓発キャンペーンを図る。

市イベント・施設に於ける啓発活動

多くの道民が参加する市民イベント、祭り、環境フェアやリサイクルプラザ、公民館などを通じた「雑がみさまを探せ！」啓発を通じ、一人ひとりの参画意識醸成を図る。

大学生ボランティアとの連携

市内の大学環境活動団体などを通じた、学生を募集、「雑がみさまを探せ！」運動の支援を通じた持続的な啓発活動の組織力強化、学生自身への社会課題解決体験のきっかけとする。

地元企業との連携による資源循環

大規模商業施設、商店街店舗を通じた、地域ポイント利用・認証制度（「さっぽろリサイクル応援店」等）による消費者との接点強化を推進。企業の紙袋への「雑がみ回収に利用」を訴求する表示協力。

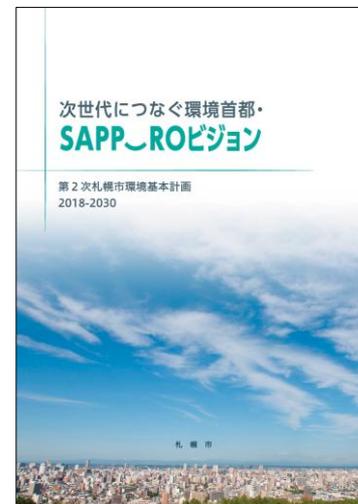
5. 札幌市 第2次環境基本計画（2018～2030）との親和性

循環型資源利用と廃棄物削減

市環境基本計画では、廃棄物の減量・資源の循環利用が明記され、資源段階的および循環的利用は条例にも要件として含まれている。本モデルは、雑がみ・食品ロス等の地域内循環を促す仕組みが中心であり、これらが、施策推進上のシナジーを生み、行政・市民・企業の協働による共通のターゲットとなり得る。

温室効果ガス排出削減

市計画は、温暖化対策や低炭素社会構築に向けた施策とSDGsの達成を結びつけたものとして策定されており、気候変動やエネルギーの視点も重要な要素。本モデルは、地域内での循環型インフラ整備を通じて脱炭素と資源循環を同時に進めるため、低炭素・気候変動対応の方向性と整合性がある。



市民参画と環境意識向上

市計画は、市民・企業・行政の協働を前提に策定され、SDGs視点による「持続可能な都市」を将来像として掲げている。本モデルでは、地域コミュニティとの協働による資源循環活動や、教育・文化を通じた生活様式の変革を促進することが不可欠であり、まさにこの協働・共創の構造は環境基本計画の理念に沿う。

大都市特性と地域波及効果

札幌市は、都市機能の集積度が高いことから、循環共生社会モデルの「ショーケース」としての価値が大きい。大都市圏で市民・事業者・大学が一体となった資源循環の実証を進めれば、その成果は全道の中小自治体へと展開可能であり、広域波及力こそ、市計画に掲げる「持続可能な都市像」と共鳴する要素である。



6. 北海道 第3次 環境基本計画（2021～2030）との親和性

地域循環共生圏との理念一致

道環境基本計画は「環境負荷を最小限に抑えた持続可能な北海道」を掲げ、循環型社会の実現を基本理念とする。本モデルも雑がみや食品ロスの削減、ごみ減量、地域資源の循環強化を通じて同様の目標を持つため、方向性が一致している。

資源循環施策との整合性

道計画では、3Rの推進や廃棄物適正処理、バイオマス利用、循環型ビジネス振興が重点施策として設定されている。本モデルにおける雑がみ回収、地域循環ビジネス創出も、それらと補完・連携しやすく、制度や支援体制との整合性が高い。

地域産業振興との統合効果

道計画は循環型産業やグリーンビジネスの創出を通じた地域経済活性化を重視する。本モデルは古紙リサイクルや地域資源循環の仕組みを整備することで、製紙・物流・リユース産業との連携が可能となり、地域雇用や経済効果を生むため、産業振興施策とも親和的である。

広域連携と道内展開の機会

道計画は道全域の施策として、市町村への環境政策推進の要請、サポート体制の整備を含む広域視点を持つ。本モデルを札幌市で検証し成果を上げることで、道内他地域への水平展開や政策反映のモデルケースとなる枠組みがすでに用意されている点で、高い親和性がある。



7. 期待される成果イメージ（順不同）

- ・ 雑がみ回収量の増加、可燃ごみに占める紙ごみ比率減少
- ・ 紙ごみによるCO2排出削減効果の定量化
- ・ 域内製紙工場とのマッチングによる資源地産地消モデルの加速
- ・ 小中高校生・大学生・高齢者・地域住民のリサイクル意識向上と世代間交流の促進
- ・ 高齢者との交流機会創出による地域コミュニティの活性化、孤立防止
- ・ 障害者の地域参画による共生社会モデルの実証と福祉的就労の場の創出
- ・ 紙リサイクル業界における次世代担い手の掘り起こしと職業理解の深化
- ・ 行政・住民・業界がともに成果を実感できる、参加型の循環型地域社会モデルの形成
- ・ 近隣自治体、南東北各県、更に全国への波及効果 等々

↓ 5%

燃えるごみ量削減

「雑がみさまを探せ！」
を通じた分別底上げ

↓ 5%

ごみ排出量削減

1人1日当たりの
ごみ排出量削減

↓ 15%

紙ごみ比率減少

家庭系の燃えるごみに
占める紙ごみの比率減少

1000+

啓発参加者数

多世代の市民参加による
コミュニティ活性化

8. 本提案への思い

これら一連の対策は、札幌市を始めとした「先進的な施策を展開」してきた**各自治体**において、**すでに個別には推進されてきた**要素である。

今回の**啓発モデルづくり**では、それらを有機的に結合し、回収・啓発・再資源化・教育・経済の各分野が一体的に連動する**“リサイクルの輪”**として、**道民に視覚的・体感的に可視化される仕組み**を目指したい。

これにより、道民一人ひとりが**地域循環への参画を一層、理解・実感**でき、**長年積み重ねてきた資源循環の取り組みが、より広く認知**され、成果として花開くことが望まれる。

SDGs未来都市、ゼロカーボンシティ宣言都市を、有する北海道において、紙ごみを中心とした可燃ごみ削減の実践は、温室効果ガス削減や持続可能なまちづくりの成果指標とも直結するものであり、**地方自治体の環境政策の模範事例**として、他自治体に発信されることを期待する。

9. 将来的な啓発活動の広域展開への期待

札幌市での「雑がみさまを探せ！」を通じた啓発モデルは、段階的に広域連携の展開が可能なスケラブル（拡張可能性）構造を有する。まず2025～27年度に札幌市で実証フェーズの啓発活動はじめ、諸課題の整理を実施し、成果を蓄積。

2028年度以降には人口構成、地理構造、リサイクルインフラの観点で本モデルとの親和性が高く、また地産地消型の紙リサイクルが成立しやすい環境にある、近郊都市への波及（江別市、北広島市、石狩市）など札幌圏の中核都市に、札幌モデルの拡大フェーズ。

2027～2028年度には地方中核都市（旭川、函館、帯広、釧路）といった道内中核都市に札幌モデルを「共創型プログラム」として展開検討。釧路では地産地消モデルにもなり得るケース。

以後、更に北海道エリア全体への拡大を目指し、2030年頃には広域環境政策への反映を目指す「北海道・雑がみ資源循環ネットワーク」を念頭に置いた、より広域に於ける資源リサイクルの全体最適化活動なども視野に入れたい。

(参考) 雑がみさまを探せ! (雑がみ回収促進社会実験)

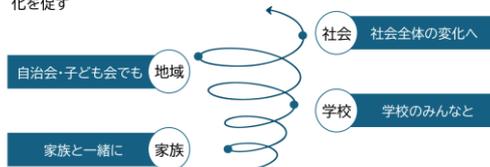
目的

雑がみの認知度向上並びに分別・回収の習慣づけを目的とした啓発活動
⇒幼少期(学童期)からの分別習慣の効果は大きく、未来にわたって環境配慮行動を行う人材育成につながる



目的

子どもを発信源として家族と一緒に取り組むことで、同居する親世代の意識変化を促す



「子どもを変えていくことで親を変え、社会を変えていく」

効果(自治体・業界)

可燃ごみに捨てられる雑がみ回収促進を進めることで、可燃ごみの削減や新たな製紙原料の確保につながる



「雑がみさまを探せ!」は、いかにして子供たちに家庭での雑がみ分別に誘導するかを、大阪大学大学院経済学研究科・松村真宏教授(仕掛け)と当センターが連携する新たな試み。

仕掛けのアプローチとは、正論(従来の正攻法)で解決しなかった社会課題を正論は使わずに参加者(小学生)が興味を持ちそうな「仕掛け」を利用することで、結果的に望ましい行動を実現し、その後も親世代を絡めて、家族で継続しやすい仕掛けを狙う。

子供達への「仕掛け」コンセプト
紙=カミ(神) ⇒ 家庭の中には、神(紙)様・「雑がみさま」が宿っている。

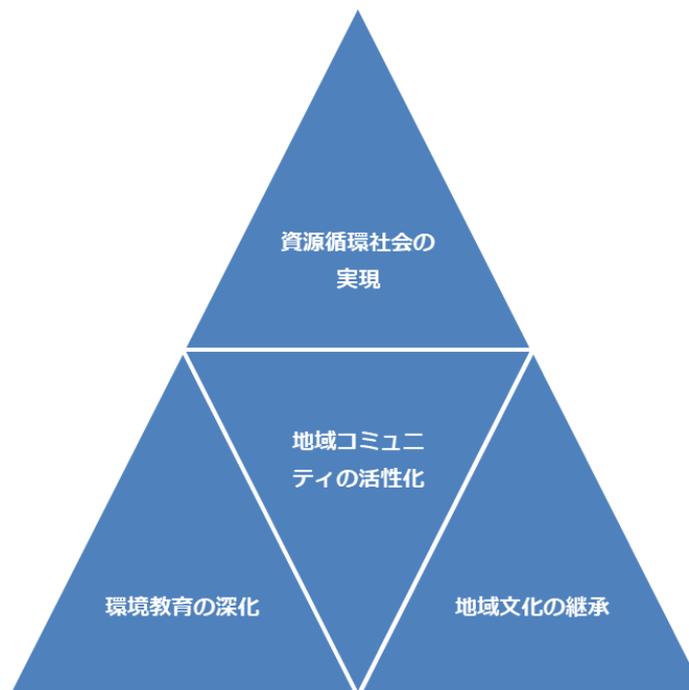
表面

裏面



一般向け

(参考) 紙リサイクルの重要性



紙リサイクル、とりわけ家庭や地域から排出される「雑がみ」は、その性質上、行政・業者・市民の協働によってのみ更なる分別と回収が可能となる分野。

また、資源循環・地域交流・環境教育・福祉・社会包摂といった複数の公共的価値を同時に実現できる特性を持ち、地域循環共生社会の実装モデルとして即効性が期待される領域。

(参考) 紙リサイクルと SDGs

SDGs・紙のリサイクルが果たすべき役割

(2022年制定)



4 質の高い教育をみんなに

- 紙のリサイクルの役割
⇒紙の再生品の利用、リサイクルを学べる教育の機会を提供する



11 住み続けられるまちづくりを

- 紙のリサイクルの役割
⇒使用済の紙を分別して再利用を図り、資源の有効活用を図る



12 つくる責任 つかう責任

- 紙のリサイクルの役割
⇒製紙業界のリサイクル可能な商品開発の推進に貢献する
⇒消費者の持続可能な社会形成への参画意識を醸成する



13 気候変動に具体的な対策を

- 紙のリサイクルの役割
⇒ごみの資源化による脱炭素社会の実現に貢献する



15 陸の豊かさも守ろう

- 紙のリサイクルの役割
⇒森林資源の持続可能な利用に貢献する



17 パートナリシップで目標を達成しよう

- 紙のリサイクルの役割
⇒多様なステークホルダーが連携し、持続可能な社会を実現する

日本の紙リサイクルは国民の分別意識の高さや善意に支えられ、また長年にわたる関係者の努力の結果、資源の有効利用や廃棄物の減量化といった循環型社会の形成にも大切な役割を果たしてきた。

当センターは、消費者や事業者を始めとした紙リサイクルに関わる多様なステークホルダーの皆様とともに、広報啓発、調査研究等の事業を通じた古紙の回収や利用の促進に向けた約半世紀弱の歴史を積み重ねている。

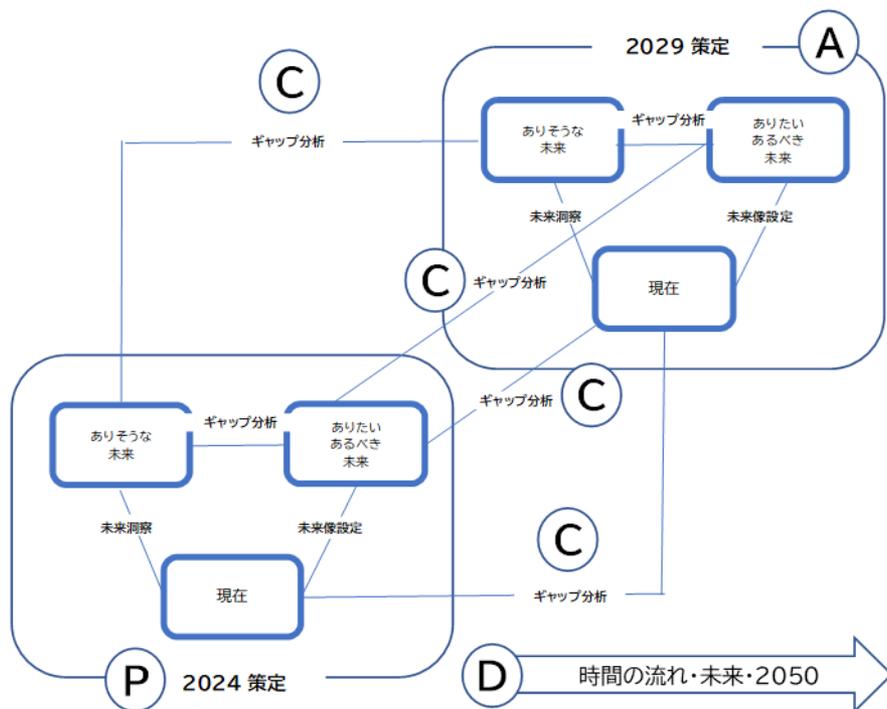
時代背景や社会が変化してきた現在も変わらず、むしろ様々な社会課題が深刻化し、国際社会がSDGs（持続可能な開発目標）の達成など持続可能な社会の実現を目指す中、原点に立ち返ったセンター活動がより一層重要になると考える。

当センターは創立半世紀の節目に向け、活動を支えていただいている皆様とともに、まずは紙リサイクルとSDGsとの関連性を再確認することを2022年にスタートした。今後も多様な立場の方々との共通言語ともいえるSDGsを通じて、小さな連携の積み重ねを大きな力に繋げ、紙リサイクルの更なる発展を目指す。



(古紙センターSDGsレポート)

(参考) Towards 2030 & Beyond・古紙再生促進センターPDCA



当センターは創立半世紀を迎えたが、その節目に当たり多くの関係者の方々から寄せられた「20」の中長期課題（サステナブルチャレンジ2050・共創共生）をお示しした。本年度から、一連の課題対応に向けての具体的な対策や、新たな試みを開始するに当たり、ロードマップイメージである「Towards 2030 & Beyond」を策定した。

様々な社会課題解決に向けた布石は2030年までがラストチャンスであり、その影響が未来の可能性を左右すると言われる時代にある中で、環境・経済・社会側面の統合的向上や、リサイクルに関わるマルチステークホルダーとのパートナーシップを念頭に置いた事業を通じて、循環型社会形成に関する連携・協働のつなぎ手としての、更なる努力が当センターにも求められている。

今後の課題対応については需給両業界の協働に加えて、これまで以上に広く、紙リサイクルに関わるステークホルダーが、改善できる技術や意識改革を総動員した、統合的なシナジーや全体最適を議論すべき時期にある。



「サステナブルチャレンジ 2050・共創共生」



「Towards 2030 & Beyond」



「創立 50 周年記念誌」

当面の啓発活動・検討についての「一例」（順不同）

本モデルの定着化に向けた**啓発実験事業** 「雑がみさまを探せ！」を軸に（2025年～2026年）

- ・市内大学生の啓発ボランティア確保
北海道大学、札幌大学、北海道科学大学、北星学園大学等の啓発ボランティア確保。
「雑がみさまを探せ！」支援を通じた、継続・持続的な啓発組織力強化、学生自身の社会課題、解決体験のきっかけとする試み。
- ・各大学EMS（ISO14001）連携
新入生への啓発授業機会、学園祭でのブース出展、継続的な啓発掲示
- ・札幌市連携、協定締結、支所・公民館等での「雑がみさまを探せ！」啓発、団体連携、キャラクターコラボレーション（さっぽろミーゴス x 雑がみさま）、「新スリムシティさっぽろ計画」との啓発協定締結
- ・市内小学校に於ける「雑がみさまを探せ！」啓発実験、回収体験
「こどもエコクラブ」活動との連携（県環境学習交流センター）、「雑がみ様を探せ！」啓発
- ・「雑がみさまを探せ！」回収啓発ボックス寄贈・設置実験（市内の小学校、支所・公民館、図書館、リサイクルプラザ、商業施設（ドラッグ、量販、ホームセンター、スーパー等）
- ・札幌市と連携協定締結中の市内大学との組織的連携検討
- ・札幌商工会議所、JC、女性会との連携、関連企業先での継続的な「ローテーション」回収運動
- ・環境団体連携（札幌市環境市民会議・えこみっと、こどもエコクラブ札幌地域連絡会、さっぽろあそエコ団等）
- ・レバンガ北海道(B)、エスポラーダ北海道 (F)、北海道イエロースターズ(V)、アルテミス北海道(V)等、地域貢献連携、試合会場での「雑がみさまを探せ！」啓発キャンペーン
- ・札幌市、及び関連エリア内のSDGs・環境フォーラム連携、公開授業提供、WS、市内イベントでの「雑がみさまを探せ！」啓発キャンペーン（環境広場さっぽろ、さっぽろ気候変動タウンミーティング、道民環境の日、環境行動月間、デコ活宣言！（地下歩行空間）フェアトレードフェスタin さっぽろ、環境科学展 等々……………

キャラクター コラボレーションイメージ



札幌市 ごみ減量キャラクター さっぽろミーゴス



要・札幌市ロゴ使用許可申請